

小山氏は、そのポイントとして、通常なら有償である商品利用の際の著作権をフリーにして、色々な場面でくまモンを見てもらう機会を多くしたとありました。一通り紹介があった後、サプライズとしてくまモンが登場した途端、会場全体が歓声に包まれました。講演の締めくくり小山氏から「幸せとは、探すものでなく気付くこと」とありました。

全体会の最後には決議文の採択と次期開催地のあいさつがありました。来年は10月3日・4日に中国四国ブロックの愛媛県松山市で開催されます。是非、来年の全国大会にはご参加いただけたらと思います。

なお、今回の大会において、東淀川区支部長 森脇安佐子さんが育成会に対する長年の功績を称えられ、全国手をつなぐ育成会連合会より表彰状の授与がありました。

【表彰状が授与された東淀川区支部長 森脇安佐子氏】



第2分科会「働く」 ～生涯学習と多様な働き方～

西部地域障がい者就業・生活支援センター
管理者 藤原 勇治

1月23日と24日の2日にわたり、こけら落とし前の熊本城ホールで第6回全国手をつなぐ育成会連合会 全国大会 熊本大会が『一人ひとりを認め合う社会の実現』～熊本のこころを全国に～を大会スローガンに開催されました。

今大会は九州ブロックの育成会大会と事業所協議会大会の併催で開催され、九州ブロックの事業所協議会として関わったのは第2分科会「働く」でした。

第2分科会「働く」では、共通テーマを「生涯学習と多様な働き方」とし、午前一般企業における障害者雇用について基調講演があり、午後シンポジウムとして障害福祉サービスを利用した働き方を取りあげて開催されました。

分科会の午前の基調講演では、横河電機株式会社採用育成課 採用育成グループ 箕輪 優子 氏より、自

社で進めてきた障がいのある社員ない社員ともに仕事を通じて成長し続けるための取り組みについての講演がありました。

箕輪氏は1998年に障害者雇用促進法の改正により、知的障がい者も雇用義務制度の対象となった翌年に特例子会社の横河ファウンドリーの設立に関わられています。

横河ファウンドリーでは、障がいのある社員が能力を発揮できない場合、「作業環境が適正であるか？」と「障害特性を踏まえた適材適所の業務であるか？」に焦点を当てて対応をしています。前者については、作業環境整備により誰でもが働きやすいようにし、合理的配慮をすることにより出来ないことが出来るようになる場合もあったということです。後者については、障害特性をリフレーミングする(視点を変える)ことにより、障害特性の思い込みを無くして判断することが大切ということでした。障がいのある従業員が成長し続けられるか否かは、管理職のマネジメント能力が大きく影響しており、社員に向けて「〇〇さんの力が必要だ」ということを伝えるようにするとともに、不必要な支援は社員の成長を妨げる場合があり、期待されていることや任されているということを実感することで成長につながると示され、実践の上で非常に参考になると感じました。

午後のシンポジウムは、基調講演をいただいた箕輪氏をコーディネーターにして、ゆたかカレッジ 長谷川 正人 氏、(一社)全国地域で暮らそうネットワーク(チイクラネット) 岩上 洋一 氏、(株)PCRホールディングス 吉田 周生 氏の3氏をシンポジストに迎えて実践報告と意見交換をしました。

最初のシンポジスト、ゆたかカレッジの長谷川 正人 氏からは、生活訓練2年と就労移行支援2年を組み合わせた福祉型大学の実践の紹介がありました。その中では、前半の生活訓練2年間を通して人格形成や人間的成長を目指し、後半の就労移行支援により就労に向けたトレーニングを行うといったものです。統計調査によると知的障がいのある人の職場定着率を見ると、1年に渡って勤め続けることができた人の割合は68%ということです。つまり、3人に1人は1年以内に離職されているということです。そのようなことから、社会人になる前段階として福祉型大学を高等教育として位置づける大切さを訴えられていました。

次のシンポジスト、(一社)全国地域で暮らそうネットワーク(チイクラネット)の岩上 洋一 氏からは、「就労継続支援C型という考え方」ということで、い